



評価レポート

シャネル財団の支援に関するウィメンズアイの活動の評価

2023年7月31日

著者: Sally Neville、百生詩緒子、大村雪香、Catrin Hepworth

翻訳: 百生詩緒子、大村雪香

Itad より提出

謝辞

時間を惜しみなく割いてくださったウィメンズアイとインタビューに答えてくださった方々、そして指導と支援をいただいたシャネル財団に感謝いたします。

免責事項

本レポートに記載された見解は、評価者のものであり、シャネル財団、または本レポートで言及されたいかなる個人・団体のものではありません。

「Itad」および3色の三角形のロゴは、ITAD Limitedの登録商標です。

内容

略語表	iii
第1章：評価の目的	4
レポートの構成	4
第2章：評価の概要と手法	5
第3章：評価から得られた知見	8
女性のエンパワメント強化に係る知見	8
リサーチとアドボカシーを通じた、より広範な影響力に関する知見	16
第4章：結論	20
第5章：提言	22
附属書1：評価過程において実践した倫理的アプローチ	24
附属書2：参考資料	26
附属書3：半構造化インタビューのサンプル数	27
附属書4：限界とバイアス	28

略語表

略語	正式名	日本語
AWC	Active Woman's College	アクティブ・ウーマンズ・カレッジ
LGBT+	Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, plus other gender expressions and identities	レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、 トランスジェンダー、その他性的指向や 性自認
NGO	Non-Governmental Organisation	非政府組織
NPO	Non-Profit Organisation	非営利組織

第1章：評価の目的

本レポートは、特定非営利活動法人ウィメンズアイの質的評価から得られた知見をまとめたものである。ウィメンズアイは、2011年の東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方沿岸部で、女性の生活向上のために2011年から活動している小規模な団体である。シャネル財団は、ジェンダー平等を推進するための女性のエンパワメントと広範な社会的・政治的变化を支援するため、2019年から2023年にかけてウィメンズアイに資金を提供した。本レポートは、シャネル財団の支援による活動の成果を評価するためにシャネル財団が委託したものである。評価は2023年3月から7月にかけて、英国を拠点とするコンサルタント会社 Itad によって実施された

シャネル財団は、資金提供するプロジェクトやプログラムの外部評価を定期的に行っており、それらの評価結果を将来の学びに活かすための重要なツールと位置づけている。従って、本評価は、資金の受益者の説明責任を果たすことを目的としたものではなく、ウィメンズアイの今後の活動を強化するための見識や実行可能な学びを生み出すことを目的としている。従って、本レポートでは、ウィメンズアイのプログラムの成果についてのエビデンスを示すことで、今後の戦略や優先事項の決定に貢献することを目指している。また、得られた知見は、今後の資金確保のためのツールとしての活用も期待される。

Box 1: シャネル財団

シャネル財団は、女性と思春期の少女たちが自らの運命を切りひらいていけることを目的とする慈善財団である。同財団は、パートナーやプロジェクトと協力し、個人レベルでの女性と少女のエンパワメントに取り組むだけでなく、社会や政治分野において女性と少女が直面する構造的な課題に対して影響を与えることに取り組んでいる。2011年の設立以来、同財団は日本や韓国を含むアジア9カ国（カンボジア、中国、インド、ネパール、シンガポール、タイ、ベトナム）で26のイニシアチブを支援してきた。主に資金支援を通じて活動しているが、能力強化やアドボカシー活動なども行っている。女性や思春期の少女に対する全ての差別に取り組み、人権を擁護し、すべての人にとってより包括的な社会の構築を目指す世界中の非営利団体、社会的企業、機関と提携している。

レポートの構成

第1章：ウィメンズアイとシャネル財団の概要と評価の目的

第2章：評価の概要、範囲、評価をする上での主要質問と評価手法（詳細は付属書1、2、3を参照のこと）

第3章：評価から得られた女性のエンパワメントに関連する知見や、調査やアドボカシーを通じた広範囲な変化（限界とバイアスに関する詳細は付属書4を参照のこと）

第4章：調査から得られた評価結果

第5章：評価結果から導き出された提言

第2章：評価の概要と手法

本レポートは、ウィメンズアイがシャネル財団に助成金の申請時に提出したログフレームにある指標達成の評価ではない。これは、ウィメンズアイが、地方に住む女性の緊急のニーズに応じて活動ができる柔軟な体制をもった団体であり、また、シャネル財団の助成期間がコロナ禍と重なったこともあり、当初のログフレームで計画していなかった活動が行われたからである。こうした変更は、シャネル財団の柔軟なアプローチによって支えられてきた。

■ 女性のエンパワメントを推進する3つの活動

2019年以降、シャネル財団はウィメンズアイの様々な活動を支援してきており、以下が主に女性のエンパワメントを支援する3つの活動であった。

● アクティブ・ウーマンズ・カレッジ（AWC）

AWCは、自分のやりたいことを実現するための一歩を踏み出したい若い女性をサポートすることを目的としたプログラムである。プログラムは全6回の講座で構成されており、講師は各分野で活躍する女性たちである。同プログラムは、参加者が新しいアイデアを得て視野を広げ、具体的な行動に移すことができるように設計されていて、参加者が自分自身を振り返り、互いに学び合うための講座も用意されている。同プログラムは、気仙沼市からの委託により、年1回実施される。2021年10月から2022年12月の間に、35人の女性がAWCに参加した。

● グラスルーツ・アカデミー東北

グラスルーツ・アカデミー東北は、岩手県、宮城県、福島県の若い世代の女性のエンパワメントを目的に2015年に開始された。シャネル財団は2022年6月に米国バークレーで開催された第11回研修を支援し、同研修に参加した11人は、教育、食、環境、差別、起業に関連する組織を訪問し、様々な関係者とディスカッションを行った。同アカデミーは、研修などの活動を通して、参加者がそれぞれの地域社会でやりたいことを明確にし、そのアイデアを実行するための力をつけることを目指している。

● コミュニティ・アクション基金

コミュニティ・アクション基金は、東北に住む、地域をより良くしたいと願う女性へ最大10万円の助成金を提供し、支援することを目的としたプロジェクトである。一次審査を通過した10名の助成対象者は、事業計画の改善支援や、事業の管理・実施方法の指導を受けた。

上述以外にも、シャネル財団の助成金を活用して、COMADOというウェブサイトを立ち上げ、東北を中心に地域の暮らしを良くする活動を通して自らも成長していく100名の女性たちのエンパワメントの物語を紹介している。ここでは、女性達特別な女性として紹介するのではなく、苦労話など含めたありのままの女性の姿で描き、地域の他の女性達にとっても役に立つ形で

紹介している。COMADO の執筆チームの中には、地域で活躍するプロのライターや写真家などを含む。

- より広範な社会的・政治的变化を促進するための調査・提言活動
 - コロナ禍に実施されたシングルマザーに関する全国的な調査の実施。
 - 宮城県気仙沼市のひとり親に関する調査を実施。

いずれの調査も、ウィメンズアイが調査結果を、メディアなどを通じて発信し、国や自治体に直接働きかけることができるよう、シャネル財団が助成支援を行った。

本レポートでは、女性のエンパワメントに資する活動とシングルマザーの調査活動を評価対象範囲にすることを念頭に、ウィメンズアイと協議の上、以下の3つを評価質問とした。

評価質問 1：地方に住む女性をエンパワーし、彼女たちがリーダーの役割を担い、地域社会の変革者として行動できるようにするという点で、ウィメンズアイのプログラムの強みと弱みは何か。

評価質問 2：ジェンダー平等の推進という点において、ウィメンズアイと地方公共団体や市議会との連携は効果的であったか。

評価質問 3：ウィメンズアイは、シングルマザーのための支援策をメディア、地域社会、企業に提言するために、調査から得られた情報をどの程度効果的に活用したか。

Box 2: 評価の方針

評価は以下のように設計された。

実用的かつ付加的であること：評価の目的は、実践的で有用な教訓と提言を引き出すことにあり、既存の文書を基に、成果、学び、見識を抽出した。これにより、一次データの収集は、すでに知られていることに追加することに注力できる。

ジェンダーに対応した質に焦点を当てたもの：この評価は、女性の声が常に中心となるように設計されている。評価のための一次データ収集は、質的な情報を収集することで、綿密な情報収集と分析に集中することができる。

参加型かつ現実的：評価は、主要な関係者との有意義な関わりを確保するよう設計されたが、その方法は適切かつ現実的なものでなければならなかった。評価者と評価対象者の限られた時間と資源という観点から、何を依頼するのが妥当であるか、何が実現可能であるかを考慮した上で設計された。

倫理的かつ害を及ぼさないこと：評価の潜在的な悪影響が最小化され、プラスの効果が最大化されるアプローチが採用された。評価の全ての段階において、倫理事項は考慮されており、倫理方針の詳細については、付属書 1 を参照のこと。

評価は、3つの段階に分け、以下の手法で行われた。

第1段階：シャネル財団とウィメンズアイによる計15の文書を含む文書のレビュー（レビューされた文書のリストは、付属書2を参照のこと）を行った。これらの文書から得られた情報は、第2段階で使用したサンプリングとインタビュー・ガイドの参考とした。

第2段階：ウィメンズアイとの参加型ワークショップや、アウトカム・ハーベスティングを用いた17名のステークホルダーとの半構造化インタビューなどを通して、一次データを収集した（下記ボックス3を参照し、サンプルの詳細については、付属書3を参照のこと）。

第3段階：ウィメンズアイから提供された情報と、他の関係者から得た情報の整合性に重点を置いた、解釈的分析と比較分析を含む分析とレポートの作成を行った。

Box 3: アウトカム・ハーベスティングの簡易版

評価手法として、予想外の成果を探るのに適しているアウトカム・ハーベスティング¹の要素を組み込んだ。今回は、ウィメンズアイと協働して、ウィメンズアイの活動が貢献したと思われる様々なタイプの変化を記述した短い「アウトカムストーリー」と関係者との質的インタビューを通じて収集された情報との照合を行った。そして、これらのストーリーは、新たな視点や課題を特定するために、インタビューデータとともにコード化され、分析された。

¹ アウトカム・ハーベスティングは、リカルド・ウィルソン・グラウとその同僚たちによって開発された評価手法である。<http://outcomeharvesting.net>

第3章：評価から得られた知見

本評価のための情報収集・分析の過程で、ウィメンズアイの調査結果を広めるための活動の多くは、地方公共団体を対象にしていたことから、評価質問2と3に重複があることが明らかになった。また、調査結果についてメディア、地域社会、企業との関わりを深めようとする取り組みもあったが、その規模は小さかった。その結果、本レポートでは、女性のエンパワメント強化に関連する定性的インタビューとワークショップから得られた情報、ウィメンズアイが実施した調査とアドボカシーから以下の6つの知見を導きだした。

知見1：ウィメンズアイのプログラムは、東北の女性にとって得難い学習の機会を提供し、彼女たちがやりたいことを実現するための方法や視野を広げるための実践的な支援を行っている。

知見2：ウィメンズアイのプログラムは、女性自身の自信や意欲を高め、自分らしく生きることを追求する上で重要な役割を果たしている。

知見3：ウィメンズアイのプログラムは、女性たちの連帯を醸成しているが、それを強化し持続させるためのさらなるフォローアップを望む声がある。

知見4：ウィメンズアイは、ジェンダー平等に直接焦点をあててではなく、女性のエンパワメントを段階的に実施していくアプローチを採用している。

知見5：ウィメンズアイは、ひとり親が直面する多分野にわたる課題を浮き彫りにする貴重なエビデンスを、地域のレベルでも国レベルでも生み出している。

知見6：ウィメンズアイは、気仙沼市ひとり親の生活調査において、設計段階から、市役所などの地方公共団体と戦略的に連携し、取り組んだことで組織の評価を高めた。

女性のエンパワメント強化に係る知見

ここで紹介する知見は、AWC、グラスルーツ・アカデミー東北、コミュニティ・アクション基金に関するものである。インタビューに応じた17人全員が、これらのプログラムが女性に与えた影響を語ってくれた。17人の中には、プログラムの参加者、ウィメンズアイの活動をフォローしていた地方公共団体職員やジャーナリストも含まれる。

1. ウィメンズアイのプログラムは、東北の女性にとって得難い学習の機会を提供し、彼女たちがやりたいことを実現するための方法や視野を広げるための実践的な支援を行っている。

AWCの参加者と地方公共団体の職員は、AWCは女性たちにとって貴重な学習の機会であると述べた。AWCの参加者の中には、プログラムへの参加は、ハードルが高いと感じて躊躇していた女性がいた一方で、参加の機会を逃すのは惜しいと感じていた女性もいた。ある参加者は、コロナ禍で、社会と距離を置いていたので、他の人たちとつながる機会を得たいと思ってAWCに

参加したと語った。また、地方公共団体の職員は、AWC は女性にとって貴重な場であり、多くの女性たちにとってこのような機会は今までなかったと述べた。

「私は新しいことを始めたかったし、AWC に参加すればそれができると思いました。AWC がなければ、今のようなネットワークは築けなかったので、苦労したと思います。新しい人たちとの出会いは、私を成長させてくれました。新しい考えが生まれ、視野が広がりました。AWC がなかったら、このようなことはなかったでしょう」(AWC 参加者)

地方公共団体職員や AWC の参加者は、ウィメンズアイは、あまり表にでてこない若い世代の女性たちを AWC に参加させることに成功していると説明した。ウィメンズアイは、普段、多くの時間を家で過ごす母親など、地域の活動に積極的に参加できない女性が AWC に参加しやすい環境を意図的につくった。ウィメンズアイが 20 代から 30 代の女性を AWC に参加させたことについての意義を、複数の地方公共団体職員が言及した。また、ウィメンズアイは、AWC の参加対象者を決定する際に、すでにリーダー的役割を担っている女性や将来リーダーになる準備ができている女性だけでなく、若い母親を含む「平均的な」女性が参加することが重要だと考えていた。ある市議会議員はこの件について、ウィメンズアイが、AWC を通じてどのような女性の参加を目指すかという戦略的なビジョンをもって、地方公共団体職員を説得したと説明した。そして、運営面においても、若い世代の女性が参加できるように託児を提供するなど、幼い子どもを持つ母親の参加を可能とする対応も行った。

グラスルーツ・アカデミー東北のバークレー研修の参加者は、同研修が東北の女性にとって得難い機会であったと述べている。同アカデミーの参加者、市議会議員、ジャーナリストは、グラスルーツ・アカデミーは、東北の女性たちに貴重な研修や海外に行く機会を提供していると説明した。アカデミーに参加する女性たちは、地域の平均的な女性たちよりも比較的エンパワーされている傾向があるものの、グラスルーツ・アカデミーは、日常ではアクセスすることができない人脈作りの機会を提供していることが重要だと説明した。

「この機会を逃したら、今後の人生で二度とこのような機会はないだろうと思いました」
(グラスルーツ・アカデミー東北の参加者)

コミュニティ・アクション基金の受領者は、同基金のおかげで、これまで助成金を申請したことのない人々も助成金にアクセスできるようになったと語った。ウィメンズアイは、同基金を通して、普段は助成金を申請しないような女性にもリーチし、助成金を申請するスキルを身につける機会を促進することを目的としていたことが、助成金受領者とのインタビューからも明らかになった。コミュニティ・アクション基金受領者の女性たちは、ウィメンズアイは励ましと自信を与えてくれただけでなく、実践的な指導を組み合わせながら申請に至るまでのプロセスの伴走をしてくれたと述べた。これは、今後、他の助成金申請に役立てることができると評価していた。

「コミュニティ・アクション基金は、初めて申請する人にもアクセスしやすかったと思います。私は、それまで助成金の申請書を書いたことがありませんでした。ウィメンズアイは、どのように申請書を書けば相手にアピールできるかなどのアドバイスをしてく

れました。また資金計画書をどのように書けばよいかも知りませんでした。が、ウィメンズアイは一から教えてくれました。」（コミュニティ・アクション基金受領者）

2. ウィメンズアイのプログラムは、女性自身の自信や意欲を高め、自分らしく生きることを追求する上で重要な役割を果たしている。

インタビューに応じた人々は、ウィメンズアイは、気仙沼市から AWC の委託を受けて以来、女性の起業家精神とリーダーシップを強化するため、より総合的なアプローチを取り入れたと述べていた。以前、別の組織が AWC を運営していた際は、リーダーシップ・スキルに重点が置かれていた。しかし、ウィメンズアイによって、リーダーシップや起業家としての役割を担うための前段階として、女性が自信を持ち、自分の考えていることを表現する力を高めるための支援が必要であることがより明確に認識されるようになった。その結果、ウィメンズアイと気仙沼市は、女性の自信と自己効力感を育てることに重点を置いたプログラムを形成することに同意した。ある市役所の担当者は、ウィメンズアイが AWC の雰囲気を変え、形式的ではないものにしたことで、プログラムの効果が高まったと説明した。特に、地元の女性を AWC の講座の講師として招いたことは、参加者にとってプログラムがより適切で刺激的なものになったと指摘した。

女性たちは、AWC に参加したことでエンパワーされたと述べ、自分が何者であるか、何者になりたいかを認識できるようになったと強調した。ウィメンズアイは、女性たちが自身の強みに気づき、やりたいことを始められるようにしたいと説明している。AWC の参加者たちも、AWC を通して、目的意識を強め、成し遂げたいことを明確にし、その達成に向けて一步を踏み出す自信がもてたと語った。他人から見ればささやかな目標に見えるかもしれないが、自身の人生にとっては非常に重要なことだと語る女性もいた。ある参加者は、自分自身の価値観や特性などを発見しながらつくる「be の名刺」の作成など、当初は実践的な講座に思えたが、想像よりもはるかに奥深いものだった、とその意義を語った。その講座が、参加者たちが、自分自身をより深く振り返り、自分自身をどのように見ているのか、また他人からどのように見られたいのかを理解できるように丁寧に設計されていて、この演習がいかに重要であったかを説明した。

「私にとって最も価値があったのは、自分を見つめ直すことでした。例えば、私たちは自分の名刺を作らなければなりませんでした。名刺を作るために、まず自分自身を定義する必要がありました。もっと自分を表現できる環境をつくりたいと思いました。AWC に参加する前は、自分が何をしたいのか漠然としか考えていませんでしたが、AWCのおかげでやりたいことが明確になり、自分や達成したい目標に対して自信を持つことができました」（AWC 参加者）

AWC の参加者たちは、AWC を通して、周囲の世界とより多くの関わりを持ち、新たに見出した自信を他者との交流に生かしていると述べている。女性が仕事や新しい役割を引き受けることで、個人的な思いを満たすだけでなく、周囲の人々により深く関わり、サポートしたりするよう

になったと語った女性もいた。また、AWC を他の人に勧め、講座の価値を知ってもらったと説明する女性もいた。

「人と話しているうちに励まされ、次のステップに進みやすくなることがよくあります。最近、友人へ AWC に参加するように薦めたし、同僚も参加しました。ちょっと影響力を持ち始めたというか、励ます立場になったのです」（AWC 参加者）

AWC の参加者たちが自らのコミュニティで影響力をもちはじめたという例がいくつかあったが、より広い範囲で社会的変化を及ぼすまでにいたった例は、インタビューからは、特定できなかった。

地方公共団体職員もまた、AWC が、女性たちが新しい人々と出会う機会を提供し、自分がどうなりたいか、何をしたいかを参加者間で話しあうことで、新しい考え方に触れたり、自信を持つようになったりしていると述べた。また、グループワークや参加者同士のコミュニケーションに重点を置くことで、他者に自分を表現することに自信を持つようになったと説明した。その結果、AWC の参加者の中には、他の研修を探して参加するようになった人もいると語った。

「緊張して自分のことを話すのが難しいと感じる女性もいますが、次第に笑顔が増え、楽しそうに講座に参加するようになります。最初は自分のことを話せない女性もいましたが、今では自信を持って自分のことや考えを発表できるようになりました」（地方公共団体職員）

地方公共団体職員とグラスルーツ・アカデミーの参加者からは、同アカデミーを通じたエンパワメントについて述べられた。グラスルーツ・アカデミーに参加した女性たちは、研修を通して、自分をよりよく理解することによって、自分の考えを実行する自信がついたなど、当初の期待以上の成果があったと語った。そして、そのような変化は特に若い世代の参加者にみられたと言った。同アカデミーの活動をよく知る市議会議員も、同アカデミーは女性たちが広い視野をもち、自らが思い描いた将来に向かって前進できるプログラムになっていると説明した。

「グラスルーツ・アカデミー東北のおかげで、女性であっても、声をあげていいのだ、と思えるようになりました。小さな変化であっても自分に力があるからこそできた、変化をもたらせた、ということを言語化・視覚化できるようになりました。以前はよく落ち込むことがありましたが、今は自分に自信をもてるようになりました」（グラスルーツ・アカデミー参加者）

グラスルーツ・アカデミー東北のバークレー研修に参加した女性は、環境問題に対する意識が高まり、自分もなにかしたいと考えるようになったと述べている。彼女は、研修後、地域社会で環境問題に取り組む意欲が高まり、勤務先の学校で環境に焦点を当てた活動を行うための助成金を申請した。また、ある参加者は、社会変革と環境問題の両方に関連して、女性たちが集まって互いにつながることの価値を以下のように語った。

「研修に参加することで、新しい視点や考えを持ち帰れると思っていました。しかし、実際はそれよりもずっと深いものを得ました。今まで、あまり周りを意識せずに生きていたので、見えなかったものがたくさんあることに気がつきました。目に見える小さな世界だけでなく、もっと大きな世界を感じることができました。それがどこにつながるかはわかりませんが、もっといろんなことを表現しなければと思いました」（グラスルーツ・アカデミー参加者）

コミュニティ・アクション基金の受領者は、ウィメンズアイに支援されていることで孤独を感じることがなく、励みになり、やる気を高めるのに役立ったと考えている。同基金から助成金を受けたことで、自分のところで手伝いをしてくれる人たちに謝金を払えるようになり、精神的な負担が減り、事業に必要な支援を受けるための予算をきちんと立てられるようになったと述べた。ある女性は、助成金を必要に応じて柔軟に使えることと、ウィメンズアイとのつながりを感じられることに、資金的なサポート以上の同基金の価値があったと強調した。

「同基金の伴走支援を通して、困っているときに困っていると言わない自分がいることに気づきました。他の人に頼っていいことが分かりました。地域の女性たちが新しい一歩を踏み出したいと思ったとき、コミュニティ・アクション基金はとてもいい制度です。他のお母さんたちにもウィメンズアイを紹介したいくらいです。主婦であっても、趣味としてではなく、仕事として自分のやりたいことをやって、その対価としてお金をもらうことの重要性に気がつきました」（コミュニティ・アクション基金受領者）

3. ウィメンズアイのプログラムは、女性たちの連帯を醸成しているが、それを強化し持続させるためのさらなるフォローアップを望む声がある。

AWC の参加者は、グループの一員であると感じることの重要性を強調した。彼女たちは、他の参加者たちと経験や考えを分かち合うことから刺激を受け、自分たちを取り巻く社会により深く関わっていると感じることに価値を見出していた。ウィメンズアイは、コロナ禍において、講演者の講義を撮影し、オンラインで配信するなどの対応を行った。AWC は、対面での講座を大切にしているものの、何人かの女性たちは、オンライン講座であっても刺激的で、示唆に富んでいて、やる気を起こさせるものであったと言い、自分自身の感情や考えをはっきりと発言し、他の人たちと分かち合うことができたことの重要性についても述べた。AWC の最後に、参加者が気仙沼市長に対して自分たちのビジョンを発表する機会があるが、女性たちにとって、自らの考えや話を市長に聞いてもらえることは貴重な機会であると語った。自分の意見を明確に発言することが一般的でない東北の女性たちの文化・社会的背景を考えると、この機会は、画期的であると力説した。さらに、ウィメンズアイは、市長が地域の女性が直面している問題についての情報に触れることの意義を強調した。

「私はエンパワーされた仲間の発表を聞きました。私たちは、自分自身を見つめ直し、より広い視野で物事をとらえました。日本の社会では、目立つことは憚れますが、市長

に自分に何ができるかを発表する良い機会でした。以前は、人生を諦めていましたが、今は目的意識をもって歩んでいます」（AWC 参加者）

多くの参加者が、仲間との繋がりが AWC の最も重要な側面のひとつであるので、この繋がりを継続できるようにしてほしかったと語った。これは、女性たちが目標に向かって前進することへのサポートが継続され、長期にわたってモチベーションを維持したいということである。AWC の講座の期間を超えて、グループの一員であることを感じ続けたいという女性もいた。ソーシャルメディアを通じて他の参加者の様子を見たり、お互いに連絡を取り合ったり、お知らせを見たりしているという言及が数人の女性たちからあったものの、参加者たちは AWC を通じて知り合った仲間とさらなる交流を大切にしたいと考えているようだった。何人かの地方公共団体職員も、AWC の参加者同士のネットワーキングの価値と、これらのネットワークが将来において女性たちが何かを成し遂げていく際に重要な要素となることを認識していた。

「AWC を取り巻くコミュニティをもっと広げ、もっと強くしたい。過去の AWC の参加者たちも含めたネットワークを作りたい」（地方公共団体職員）

グラスルーツ・アカデミーに参加した女性たちも、参加者同士のつながりの価値を強調したが、研修終了後のさらなるフォローアップを望んでいた。参加者同士の横のつながりによる女性の連帯は、ウィメンズアイがグラスルーツ・アカデミーに期待していることでもあった。グラスルーツ・アカデミーに過去に参加した女性たちは、女性たちが同じ目的や課題に向かって一緒に進んでいくためには、グループとして共同作業をすることが重要であると強調した。何人かの女性は、ソーシャルメディアなどを通じて仲間たちと連絡を取り合っているが、ウィメンズアイによる円滑なフォローアップが、さらなる前進を促し、目的を実現するのに役立つと感じていた。ある参加者は、このフォローアップの全てをウィメンズアイが負うべきではなく、参加者たち自身も、つながりを維持し、やる気を持続させる上で重要な役割を担っていると感じていた。

「研修の後も、参加者たちと繋がっているが、この繋がりをもっと活用して将来、なんらかの活動ができるようになるのではないかと思っている。グラスルーツ・アカデミーで出会った女性たちとは、強い信頼関係で結ばれていて、長期間会っていなくても、なんでも話することができる。だから一緒に地域で人を繋げるような活動などできるようになればいいな、と思っている」（グラスルーツ・アカデミー参加者）

コミュニティ・アクション基金の受領者は、同基金から助成金を受けた女性たちと一堂に会する機会が一度だけあったが、そういった機会が多かったらもっと良かったと語った。ある女性は、同じ助成金を受けた女性たちが、どのような活動をして、どのような成果を上げているのかを知ること、自分たちも励まされ、刺激を受けることができたのではないかと述べた。また、ある女性は、コロナ禍により、最終報告会ではオンラインで発表する必要があったため、プレゼンテーションが難しかったと言った。短時間で分かりやすいプレゼンテーションの方法にしなければいけないところ準備不足となってしまったため、プロジェクトの最後にウィメンズアイと直接顔を合わせたほうが有益だったと感じたと語った。

「コミュニティ・アクション基金の受領者たちの報告会があった。その時、初めて他の受領者たちと顔を合わせ、他の人たちが何をしているのかを知ることができた。もっと前からその人たちと交流があれば、お互いに励ましあうことや情報交換ができたかもしれない。ウィメンズアイのスタッフたちの仕事がどれほど大変かを知っているが、もっとフォローしてほしい。女性たちは一歩前進しても、その一歩だけで終わってしまうことがよくある。そこで終わらないような継続的なフォローアップがあればと思った」
(コミュニティ・アクション基金受領者)

4. ウィメンズアイは、ジェンダー平等に直接焦点をあてるのではなく、女性のエンパワメントを段階的に実施していくアプローチを採用している。

グラスルーツ・アカデミーの参加者たちは、ジェンダー平等に直接関連する議論に言及した。二人の参加者は、研修を通して、性的アイデンティティとジェンダー規範についての意識が高まり、研修終了後に、子どもたちやその家族との活動にその知識を反映させ、特に子どもの家族たちに有益だったと説明した。また、一人の参加者は、プログラムで学んだ LGBT+ と差別について、職場の同僚と話し合ったと述べた。彼女たちは、ジェンダー平等について議論するセッションが、杓子定規で固定的な視点に立ったものではなかったと言い、グラスルーツ・アカデミーは、多様な意見を尊重しながら社会変化を推進することに重点を置いていると説明した。

「みんなの意見を尊重しながら、社会変革の文脈における平等の意味について理解を深めることができたし、正解がない中で、様々な視点を得ることができた。それらは、私が仕事で関わっている子どもたちやその家族にとっても役に立つことであった」 (グラスルーツ・アカデミー参加者)

一方で、AWC 参加者やコミュニティ・アクション基金受領者とのインタビューからは、ジェンダー平等についての明確な言及はほとんどなかった。これは、ウィメンズアイがこれらのプログラムにおいて、ジェンダー不平等の根っこにある伝統的なジェンダー規範や力関係に直接焦点を当てるのではなく、個人のエンパワメントに重きを置くアプローチをとっているからであるようにみられた。つまり、ウィメンズアイは、社会の変革に焦点を当てるよりも、より広い波及効果を期待して、個々の女性たちが徐々に力をつけて変化していく、よりソフトで段階的なアプローチに意図的に重点を置いているようにみえた。何人かの地方公共団体職員は、このアプローチを支持しているようで、コミュニティ内で力をつけた女性の数を増やすことは、時間はかかるが、より広範な変化に重要な貢献をすることになると説明していた。ある市議会議員は、ウィメンズアイの最終的な目的は、女性がエンパワーされることが当たり前のことにすること、そして地域の女性が前進できるようにしてくれるロールモデルをコミュニティ内に作ることでであると強調した。

「ウィメンズアイが (AWC を通じて) 達成しようとしている変化は時間がかかるかもしれないが、地域にエンパワーされた女性が存在することが重要だ」 (地方公共団体職員)

個人のエンパワメントに焦点をあてることは、固定化されたジェンダー規範や役割に挑戦することへは容易ではなくなるが、プログラムを地域の現状に受け入れられるようにするための意図的な戦略であるように思われる。実際、ウィメンズアイは自分たちの活動を「小さな一步を重ねて共に歩む」と認識しており、女性の実際的なニーズに焦点を当て、「エンパワメント」という言葉を時と場所によっては使わないなどの配慮をしている。インタビューに応じたジャーナリストや地方公共団体職員は、ウィメンズアイと同じような課題に取り組んでいる団体が他にないことや、現地の状況を考慮した上で、個々のプログラムで何を達成するのが現実的なのかを考えることの重要性を強調した。ある NGO の代表の一人もこのアプローチに同調し、一つの小さな団体だけでは、凝り固まったジェンダー規範に挑戦することはできないと述べた。

「ウィメンズアイのプログラムは、女性が次のステップに進むために羽ばたこうとする力を与えている。（若い）母親が講座に参加するために 1、2 時間家を空けるだけで責められるような地域において、ウィメンズアイは一步一步、女性のエンパワメントを進めようとしている。女性の発言力が低い中で、女性のエンパワメント活動を実施するのは並大抵のことではない。素晴らしいミッションを掲げても、コミュニティの信頼を得るのはとても難しい。ウィメンズアイは、地道な努力と活動によって、地域の人々の信頼を得ることに成功していると思う。ウィメンズアイは素晴らしい活動をしていると思う」（ジャーナリスト）

より広範なジェンダーの不平等に直接取り組むのではなく、個人のエンパワメントに重点を置くことが、ウィメンズアイのプログラムに地域の女性たちが参加しやすくするための意図的なアプローチの一部であるようだった。

ウィメンズアイが特に重視しているのは、地域住民をスタッフとして採用し、女性のエンパワメント活動などに参加する機会の少ない、地域の「平均的な」女性にアプローチすることである。このより穏やかで段階的なアプローチは、地域やそこに住む女性たちと長期的な関係を築き、信頼感を醸成し、地域の「平均的な」女性の参加促進という狙いに貢献しているように見える。

この穏やかなアプローチは、ウィメンズアイの規模だけでなく、「部外者」とであると見られやすいことなどを鑑みると、適切なアプローチなのかもしれない。ウィメンズアイは、継続的な社会変化は、地域の人々によってのみ推進されることを明確に強調している。

グラスルーツ・アカデミー参加者の一人は、ウィメンズアイで働く女性の何人かは東京出身で、国際的なイベントにも出席し、グローバルな考え方や議論に通じていることを地域の女性たちが認識していると説明した。しかし、彼女は、ウィメンズアイの強みは、東北の地元の女性たちと同じ目線で課題に関わり、フラットな関係で意見交換や活動ができることであると語った。

「東北の女性たちは、東京の女性たちと話すことに不安を感じることもあるかもしれませんが。でもウィメンズアイのスタッフは、『私たちはウィメンズアイです、地域を変えようとしています』とは言わない。控えめで賢いし、若いし、とても洗練された団体です」（グラスルーツ・アカデミーの参加者）

リサーチとアドボカシーを通じた、より広範な影響力に関する知見

ここで紹介する知見は、ウィメンズアイが調査を通じてエビデンスを生み出し、アドボカシーを通じて社会をより良い方向に変えていくという活動に関するものである。インタビューに応じた人々の内 8 人が、これらの活動について言及した。8 人の中には、ウィメンズアイの活動に直接参加した女性や、ウィメンズアイの活動をみてきた地方公共団体職員やジャーナリストが含まれる。

5. ウィメンズアイは、ひとり親が直面する多分野にわたる課題を浮き彫りにする貴重なエビデンスを、地域のレベルでも国レベルでも生み出している。

地方公共団体職員たちは、「気仙沼市ひとり親の生活調査」は、地域のひとり親としての体験や考え方などについて、これまでにない方法で調査をしたことによって、とても実用性があると強調した。この調査から、ひとり親が直面する課題は子育てと金銭的な課題だけではなく、様々な課題があることが把握された。ある市議会議員は、ウィメンズアイの調査がなかったら、自治体はひとり親が直面する課題にこれほど関心を持たなかっただろうと断言した。同市議会議員は、この調査によって、ひとり親が直面する多方面にわたる課題の性質が浮き彫りになり、多くの場合、これらの課題について初めて議論が促進されたと説明した。これは、確かな根拠に基づいて対話を始めるというウィメンズアイの使命に沿ったものであった。これにより、市役所の各部署がその課題に対応するために互いにコミュニケーションを始めたと説明した。

「気仙沼市ひとり親の生活調査」（調査主催：NPO 法人「人間の安全保障」フォーラム、協力：ウィメンズアイ）は、気仙沼市に焦点を当てたものであったことが、その実用性と価値を高めることになった。ある市議会議員は、調査が地域に特化したものであったことで、地域の声を反映させることができ、全国規模の調査にはない方法で、調査結果を市役所の担当部署に説得力をもって示すことができたと言った。また、調査を通じて、人口減少とひとり親、特にシングルマザーが直面する課題が、ジェンダー不平等の構造と同じ問題に根ざしているという事実について、地方公共団体職員の間で認識が高まったときいた。

地方公共団体職員は、「気仙沼市ひとり親の生活調査」によって、ひとり親、特にシングルマザーを今後どのように支援していくべきかを考えるための具体的な情報を得ることができたと説明した。ある市議会議員は、調査によってひとり親が直面する住宅問題、特に現在利用できる支援についての認識不足を指摘でき、それは市政が容易に改善できることだと感じていた。別の地方公共団体職員は、ひとり親のためにどのような政策が必要なのかについて、ウィメンズアイの調査以降、考えが変わったと説明し、ひとり親のための的を絞ったスキルアップ、職業訓練プログラム、就労支援の必要性を強調した。これらはすべて、現時点では構想の段階にすぎないが、調査によって課題が明らかになったことで、政策の変更や具体的な支援につながると確信していた。また、調査結果を報道したジャーナリストは、ひとり親家庭の課題解決のためにどこに重点を置くべきかがわかったと述べていた市議会議員がいたと語った。

「調査結果を受けての対策は、一步一步ではあるが、確実に前進している。ここで重要なのは、我々がしっかりと問題を認識し、真剣に取り組むようになったということだと思う」（地方公共団体職員）

「ウィメンズアイが実施したひとり親に関する調査は、とても重要である。ひとり親の具体的なニーズが明らかになり、それに対応するためには、自治体の様々な部局が連携して実施していかなければならないことが分かった。既に行っているサービスを改善していかなければならない」（地方公共団体職員）

「気仙沼市ひとり親の生活調査」は、すでにシングルマザーが抱えている問題に精通しているウィメンズアイが主導したため、より有益で適切なものになったと、インタビューに応じた人々が述べていた。市役所の担当者は、ウィメンズアイがシングルマザーを支援するために行っている活動（カウンセリング支援など）と調査設計の関連性を指摘した。つまり、ウィメンズアイが現場での活動からすでに認識している課題や偏見などを調査によってより明らかにできたと説明した。市議会議員の一人は、ウィメンズアイは、女性と市役所の双方のニーズを理解しているからこそ、有益な調査を実施することができたと述べた。

「気仙沼市ひとり親の生活調査」に関してはメディアも報道しているが、そのリーチは小規模なものであるようだった。インタビューに応じたあるジャーナリストは、調査結果をみて、ひとり親の収入がいかに少ないかに衝撃を受け、今後も地域のシングルマザーが直面する課題について記事を書き続け、その際にはウィメンズアイにも情報を求めていくと説明した。もう一人のジャーナリストも、気仙沼市のシングルマザーの調査結果について記事を書いていた。

「時間があったら何をしたいか、という質問に対して、大半のシングルマザーが『寝たい』と答えたのには、絶句しました。何とかできないものかと。今後も、ひとり親家庭に関する記事を書いたり、気仙沼市の市議に女性の状況やシングルマザーの状況について質問を続けたりしていく予定です。ウィメンズアイは、気づきを与え続けてくれます」（ジャーナリスト）

どちらのジャーナリストもウィメンズアイの活動を何年も前から知っており、ウィメンズアイのような活動をしている団体は他になく、地域の女性に関連する記事を書く際は、ウィメンズアイにアドバイスを求めていると述べた。あるジャーナリストは、ウィメンズアイのことを聞いて初めて、女性の課題について記事を書くようになったと説明した。その中には、ウィメンズアイが取り組んでいる放課後プロジェクトについてのインタビューも含まれていた。また、そのジャーナリストは、AWCの最初と最後のセッションにも参加したと語った。

ウィメンズアイは、他の NGO や研究者と連携して、シングルマザーの全国的な調査を実施し、その調査はシングルマザーの施策に大きな影響を及ぼした。シングルマザーを支援する団体の代表者は、同調査はコロナ禍で研究者、アドボカシー、現場支援に携わる人々が一同に会して実施されたもので、ウィメンズアイがいなければ全国調査は実現しなかったと断言していた。これは、

ウィメンズアイが調査資金を提供しただけではなく、調査実施や、調査後のデータのクリーニングなども行ったからであった。

シングルマザーの全国調査の結果には、メディアや政治が大きく関わった。ウィメンズアイは、研究者との連携が調査結果の信頼性を高めただけでなく、政治とのつながりをもつことができたことが有益だったと語った。シングルマザーを支援する団体の代表は、調査の結果をメディアで報道したり、厚生労働省で記者会見を開いたりして、広く知られるようにしたと語った。そして、調査結果が国会で何度も引用されただけでなく、国会議員から新しいデータはいつ入手できるのかと質問されるなど、政策策定に有用であったことが示されたと説明した。調査結果がすべての主要政党に共有され、党派を超えた調査への関心を集めることができたことが重要であったと強調した。さらに、同代表は、同調査がコロナ禍のシングルマザーへの給付金支給政策に影響を与えたと述べた。

6. ウィメンズアイは、気仙沼市ひとり親の生活調査において、設計段階から、市役所などの地方公共団体と戦略的に連携し、取り組んだことで組織の評価を高めた。

インタビューに応じた人々は、調査結果だけではなく、調査実施のプロセスも良かったと強調していた。ウィメンズアイは、調査開始前に、気仙沼市の関係者と相談し、調査に対する関心を確認し、賛同を得たうえで開始した。ある地方公共団体職員は、ウィメンズアイが早い段階から、気仙沼市役所の特定の部署や個人に働きかけ、的を絞ったことが功を奏したと述べている。このプロセスは、調査対象者の抽出や、調査対象地域のひとり親の特定に役立ただけではなく、調査の質問内容の形成にも役立ち、関係者に評価された。例えば、気仙沼市役所保健福祉部子ども家庭課は、調査範囲や調査項目の検討に大きく関与した。ウィメンズアイと気仙沼市との強固な連携は、調査の実施から結果発表まで続いた。

「我々もウィメンズアイと一緒に調査をしました。ひとり親という言葉には、貧困というイメージがありますが、ひとり親の抱えている問題は、貧困だけではなくありません。もちろん金銭的な側面もみる必要がありますが、ひとり親の方々が、なにを望んでいて、何に苦しんでいるのか理解したかったのです。ウィメンズアイは、調査において、貧困以外の視点を調査の質問項目に入れました」（地方公共団体職員）

「気仙沼市ひとり親の生活調査」におけるウィメンズアイと気仙沼市との緊密な協力関係は、ウィメンズアイが長年にわたり、市役所の様々な部署や職員と築いてきた強固な信頼関係の上に成り立っている。実際、ウィメンズアイは、自分たちの調査やアドボカシー活動を、より広い意味での政策変更のための地ならしの一環であると説明している。

また、ウィメンズアイと地方公共団体との強固な協力関係は、今回のひとり親の調査や他の多くのプログラムに独自の資金を提供することができたためでもあると考えられる。このことによ

り、資金提供者と助成対象者という関係よりも、より対等な関係性でいることを促進している可能性がある。

「ウィメンズアイの強みは、自治体との連携が非常に強いことです。自治体が NGO と連携する時は、主に自治体が NGO に業務を委託してその資金を出すことが通常の関係性ですが、ウィメンズアイと自治体はお互いに良い相乗効果を発揮することができます」（地方公共団体職員）

ウィメンズアイが、「気仙沼市ひとり親の生活調査」を実施したことで、気仙沼市との関係がさらに強固になり、ウィメンズアイへの信頼も高まったようだ。複数の地方公共団体職員は、ウィメンズアイは長年にわたってしっかり運営されている信頼できる団体だという評判を築いており、同調査によって、ウィメンズアイは、行政や地域住民のニーズを理解するだけでなく、高度な調査能力を持ち、エビデンスを活用し、有識者と効果的に連携できる組織として認知されるようになったと言っている。また、ある市議会議員は、ウィメンズアイは、シンクタンクのように活動できる団体として多くの人に見られるようになったと述べた。さらに、インタビューに応じた地方公共団体職員の全員が、今後もウィメンズアイと協力していくことに強く賛同していた。

「ウィメンズアイの強みは、女性への個別支援、ネットワーク、アドボカシー能力、調査能力など、すべてを網羅していることで、ほとんどシンクタンクのように活動できる。このような団体は他にはありません」（市議会議員）

第4章：結論

全体を通して、ウィメンズアイの活動は、女性のエンパワメントにプラスの影響を与えたというエビデンスがみられた。ウィメンズアイの活動に参加した女性たちは、自分自身を違った角度から見るができるようになり、ポジティブに自分らしさを定義できるようになっている。ウィメンズアイの活動に参加した女性たちは、目標に向かって最初の一步を踏み出す勇気をもつことができたと言っている一方で、活動から得たエンパワメントの効果を持続させるには、長期的なフォローアップがもっと必要であることも述べていた。

ウィメンズアイの活動に参加した女性たちは、地域や自身が所属するコミュニティにより深く関与し、小さな変化を及ぼしているようであった。しかしながら、インタビューからは、彼女たちがリーダーの役割を担うようになったり、社会変化を促進するような行動をとったりしている事例はあまりなかった。

ウィメンズアイは、特に AWC のプログラムを形成する上で、市役所と効果的に連携していたが、ウィメンズアイは、敢えてジェンダー平等を直接的に推進することを避けてきた。これは、ウィメンズアイが地域の状況をしっかり把握し、地域からの反発の可能性を最小限にしたうえで、長期的な変化を狙う戦略的アプローチに基づいているようであったからである。ウィメンズアイは、女性たちが、長期に渡って徐々にエンパワーされるために忍耐強くかつ献身的に活動していた。

ウィメンズアイは、国レベルでも地域レベルでも、ひとり親に関する価値ある調査結果を得るために、多様な団体や機関と効果的に協力してきた。ウィメンズアイは研究者などの有識者と連携できる組織であり、データの重要性、エビデンスに基づくプログラムや政策立案の価値を理解している組織であると認識されるようになった。特に、ウィメンズアイが、早期に地方公共団体を含む市の関係者から調査実施に対する関心と賛同を得るというアプローチが功を奏した。重要なのは、調査によって政策立案者に貴重な視点や根拠を提供したことであり、それによって政策立案者は、場合によっては初めて、ひとり親が直面する問題に取り組むことができるようになった。また、調査結果は、多部門にまたがる課題を浮き彫りにし、それにより、部局横断的な関与と計画立案を促した。

また、ウィメンズアイは、メディアとの関わりの中で調査結果を活用した。これは特に国レベルで効果を発揮したが、地方レベルではメディアの関心は国レベルまでは至らなかった。インタビューに応じた人々からは、ウィメンズアイが調査結果を活用してビジネス界に影響を与えたという情報や地域で直接的な変化のための提言などをしたという情報も得られなかった。しかしながら、ウィメンズアイは、気仙沼市の地方自治体に、調査の結果を活用して、政策提言を継続的に実施している。

Box 4: ウィメンズアイは他者からどう見られているか

政府関係者、協力団体、ウィメンズアイの活動参加者などを対象に16のインタビューを行ったが、全員が、ウィメンズアイは強く、信頼でき、評判の良い組織であると語った。ウィメンズアイは、自分たちの組織について、ソフトで緩やかなアプローチをとり、上下関係を持たずに活動していると説明しており、これは、インタビューに応じた人々も同じであった。ウィメンズアイのアプローチと活動スタイルは、地域に住む女性たちだけでなく、地方公共団体職員とも信頼関係を築く上で重要なポイントであった。また、ウィメンズアイが提供しているプログラムやアプローチは唯一無二であることを強調する人々も多かった。「東北地方でウィメンズアイのように女性のエンパワメント支援に取り組んでいる組織は他にない」「ウィメンズアイのような組織は、東北地方では他に思いつかない」という声が多かった。

「ウィメンズアイは、女性のエンパワメントについての灯台のような存在であり、目標とする基準を示していると思います。」（ジャーナリスト）

第5章：提言

本評価から得られた知見に基づき、ウィメンズアイの活動をさらに強化することに重点を置いて、4つの提言が作成された。その概要は以下の通りである。

提言1：ウィメンズアイの活動が達成しようとする長期的なビジョンを示すことが有益である。

ウィメンズアイが実施している活動は多岐に渡り、対象としている女性のタイプも、比較的エンパワーされている女性、地域の「平均的な」女性、シングルマザーなど多様である。ウィメンズアイは、いかに団体が実施している多様な活動が、総合的に長期的な変化に貢献するかを明示することが有益だろう。そうすることで、ウィメンズアイは潜在的な資金提供者に、組織の活動の幅広さは断片的なものではなく、意図的で戦略的なものであると確信させることが容易になる。また、明確なビジョンを描くことは、ウィメンズアイが今後どのプログラムや活動分野に優先的に取り組むべきかを決定する際の軸となる。このようなビジョンの作成は、ウィメンズアイの取り組みが最終的にジェンダー平等にどの程度貢献することを目指しているのかを明確にすることにも役立つ。そして、ビジョンに向けた主要なマイルストーンを特定することは、ウィメンズアイが意図した変化が想定したとおりに起こっているかどうかを確認するのに役立つだろう。これによって、必要に応じて優先順位を変更したり、アプローチを変えたりすることが可能になる。

提言2：個々のプログラムに対する現実的な目標を明確にし、それに対する進捗状況のモニタリングを行う。

ウィメンズアイは、具体的なプログラムや個々の活動分野について、何を達成するつもりなのかを明確にすることが有益であろう。これには、伝統的なジェンダー規範が深く根付いている困難な環境で実施される短期的で小規模なプログラムを通じて、達成できることをより現実的に考えることも含まれる。個々の活動の達成目標を明確にすることで、ウィメンズアイは、潜在的な資金提供者に対して、比較的ささやかな変化であっても、直接影響を与える人々にとって深い意味を持ちうること、特にそれが変化への段階的で漸進的なアプローチの一部である場合には、より自信を持って主張できるようになるはずである。ウィメンズアイは、現実的なプログラム目標を明確に示すことで、個々のプログラム、調査、特定のアドボカシー活動が、組織の長期的ビジョンにどのように貢献することを意図しているかを示すこともできる。ウィメンズアイのインパクトの多くが小規模であること、政策提言だけでなく個人のエンパワメントにも重点を置いていることを考えると、低コストの質的モニタリング・アプローチは、ウィメンズアイの活動の価値を把握し、効果を最大化するのに有益である。これらは潜在的資金提供者にとっても安心材料となる。

提言3：ひとり親や東北地方の女性たちの課題に関するエビデンスを特定する役割を継続する。

ウィメンズアイは、これまでの調査の成功を踏まえ、引き続き、ひとり親が直面する課題に焦点を当てたり、他の脆弱な女性たちの課題に関するエビデンスを特定したりするなどさらなる調査の機会の確保を検討すべきである。ウィメンズアイが資金提供者に強調すべき点は、ウィメン

ズアイが、市民社会、研究者、地方公共団体と協力し、課題に対する有用なエビデンスを活用して効果的な連携を確保する能力をもつということである。ウィメンズアイは、このようなスキルを兼ね備えていることで、他の組織と一線を画しているといえる。

提言 4：長期的なエンパワメントと共通の目的達成に向かって協働できるように、勢いと連帯を持続する。

ウィメンズアイの活動を通して、参加者同士が刺激を受け、連帯感を持つことは、ウィメンズアイが推進するエンパワーメント・プロセスの重要な側面である。ウィメンズアイは、プログラムが終了した後も、参加者同士の継続的な繋がりをもてるように奨励し、可能にする方法を検討することができる。これは、ソーシャルメディアを利用した既存の取り組みにとどまらず、参加者同士が直接会ったり、より正式につながったり、ペアを組んで活動するなどの機会を継続的に支援することなども考えられる。これは、女性たちのエンパワメント効果を持続させるのに役立ち、ウィメンズアイの段階的なエンパワメントのアプローチに合致する。また、社会変化に貢献するという点で、より広範な「波及」効果を最大化するのにも役立つだろう。

附属書 1：評価過程において実践した倫理的アプローチ

我々は、英国の外務・英連邦・開発局（Foreign Commonwealth and Development Office）が発行した「倫理的調査・評価・モニタリング・ガイダンス」と国連評価グループ評価倫理ガイドラインに基づく、Itadの安全管理と倫理の包括的ガイダンスを基に、以下の4つの倫理原則に従って評価活動を実施した。この原則は、準備段階、チームの構成、評価手法の選定など、全ての評価活動における過程において貫かれた。

- 調査や評価結果から得られる利益を最大化し、害を最小化する。
- 人々の権利と尊厳を尊重する。
- 誠実さ、能力、責任をもって行動する。
- 信頼性と価値の高い仕事を提供する。

表 1 は、これらの原則の概要を説明したものであり、評価の設計と実施を通じて、これらの原則が具体的にどのような意味をもつのかを述べている。また、これらの内容は、日本においても適切であるかを評価チーム内で協議し、合意したものである

表 1：倫理原則の概要と運用

倫理原則	概要	具体的な運用方法
調査や評価結果から得られる利益を最大化し、害を最小化する。	評価は価値を創出し、意義があり、前向きな変化をもたらす可能性があるものでなければならない。評価プロセスは、害を及ぼすものであってはならず、参加者と評価チームの安全を優先し、リスクを減らすべきである。	- ウィメンズアイにとって具体的な価値と実用性をもった知見を得ることに焦点をあてた。 - ウィメンズアイにとって活用しやすい形で知見を伝えられるよう、評価報告書を構成した。 - 評価に参加した人々の発言などが、今後の資金調達に関する決定に直接的な影響を与えないことを理解できるよう、明確に評価の目的を伝えた。 - 参加者との信頼関係を築くために時間をかけ、参加者本人もしくは、その周辺の人々の心理的安全について懸念を示した場合には、それに対応できるよう準備した。
人々の権利と尊厳を尊重する。	評価に関わる人々の福祉が評価自体よりも尊重されないといけない。評価プロセスは、人々に力を与えるものである必要があり、人々から単にデータを引き出すことを目的とした手段であってはならない。必要なデータを収集するプロセスにおいて、関係者全員が尊重され、安全で有意義	- 評価に係る活動が意図しない結果をもたらす可能性があることを認識し、調査手法や時間設定など、参加者にどのような負担を与えるかを考慮した。必要な場合はいつでも、調査の停止やケースに応じて手法を変えるなどの準備を行った。 - インタビューの質問が現地の状況に適しており、参加者を困惑させたり、おとしめたりするようなものでないことを確認した。 - インタビュー開始前に、意思確認を行ってからインタビューを始めた。正式な書類に署名することを避けたが

	なものとしなければならない。	ことを理解し、同意文書を読み上げ、口頭での同意を求めた。 デリケートなテーマについては、必要に応じてウォームアップとウォームダウンの質問を用いて慎重にアプローチした。
誠実さ、能力、責任をもって行動する	評価に参加する人を選ぶプロセスは公正である必要があり、個人やグループにかかる負担は妥当なものでなければならない。そのプロセスが、たとえ意図的でなくとも、社会から疎外されたグループに対する差別や排除を助長することのないよう、関連するすべての社会グループを積極的に調査に参加させるべきである。	- すべての参加者が有意義かつ負担が少ない方法で調査に参加できるよう、インタビューの質問票、時間、会場設定に必要な調整を行った。 - 評価に参加する参加者の負担を認識し、軽食の提供や交通費の払い戻しを保証した。評価に参加することで、参加者に時間を割いてもらっていることを認識しながら参加者との時間を大切にしたい。各インタビューの最後には、ささやかな感謝のしるしとして菓子類などを用意した。
信頼性と価値の高い仕事を提供する	評価チームには、質の高い評価を実施するための適切な能力とスキルが必要である。評価の目的は、プロセス全体を通じて明確に反映される必要があり、評価の質問と使用される手法の間に明確な論理性がなければならない。	- 評価チーム内の階層に関係なく、調査を日本の状況に合った適切なものにするためには、日本人以外のチームメンバーは、現地の文化、規範、エチケットに詳しい日本人のメンバーの助言に従う必要があることを認識した。 - 評価チームの全メンバーがジェンダー平等と女性と少女のエンパワメントにコミットし、どのようなデータを収集する必要があるかだけでなく、なぜ収集する必要があるのか、各自の担当業務が評価の目的にどのように合致するかを理解していることを確認した。 - 評価チームの全メンバーが高い分析スキルを持ち、十分に評価の意義を理解することで、有意義な関わりを持ち、自信をもって詳細な質問をすることができるようになり、単に事前に作成された質問票などに固執しないようにした。 - 評価にあたって、調査項目の広さよりも深さを重視し、必要な質的データのみを収集した。これにより、人々の時間を無駄にすることなく、分析のための手に負えないほどの量のデータを生成することもなかった。

付属書 2 : 参考資料

資料名
Annual Report Year 1 Women's Eye
CHANEL Foundation Progress Report Women's Eye 02072020
Evaluation report by Hiroishi
Logical Framework Women's Eye 10202021
Monitoring Committee Minutes, February 17 2020
Monitoring Committee Minutes, October 6 2022
Monitoring Committee Minutes, September 11 2020
Monitoring Committee Minutes, March 16 2022
NPO Women's Eye Project Summary: Proposal Summary: BOARD MEETING – 13 October 2022
NPO Women's Eye Project Summary: Summary of projects submitted to the project committee – April 26, 2019
NPO Women's Eye Proposal 01.07.2019 - 30.06.2022
Progress Annual Report Women's Eye 20220922
Progress Report Year 2 Women's Eye 01312021
Progress Report Year 3 Women's Eye 02162022
Women's Eye Proposal 01.10.2023 - 30.09.2025
ウィメンズアイのホームページ
Reports of Grassroots Academy Tohoku

付属書 3：半構造化インタビューのサンプル数

表 2：質的評価のためのインタビューサンプル数

インタビューに応じた人々の属性	目標数	実際数
AWC 参加者	2	3
グラスルーツ・アカデミー参加者	2	3
コミュニティ・アクション基金受領者	1	2
ジェンダー平等を推進する団体の代表者と研究者	1	2
メディア関係者	2	2
地方公共団体職員	2	5
合計	10	17

インタビューの対象者は、目安となるサンプル数を用いて、選定した。インタビュー対象者の選定は、ウィメンズアイの協力のもとで行われた。

インタビューの所要時間は平均 1 時間であった。インタビューは、地方公共団体関係者に対してのみ一度のインタビューで 2 人一緒に質問を行ったが、その他のインタビューは、1 人ずつ行われ、評価チームメンバーの 1 人が担当し、必要に応じて議事録係や通訳が同行した。

付属書 4：限界とバイアス

どのような調査や評価においても、常に限界や潜在的なバイアスがあり、それらを認識することは重要である。本評価で考えられる主な限界と潜在的バイアスは以下の通りである。

- 我々は、インタビューする個人の特定など、調査先の対象者の選定をパートナー組織に依頼した。これは現実的な方法ではあったが、ウィメンズアイが、自分たちの組織やプログラムとの関わりの深い個人を選んだことは予想される。そのため、よりポジティブな経験を持ち、組織との長期的な関わりを維持している人が選定されたということが想定される。そのため、ウィメンズアイのプログラムとの関わりにおいて、さほどポジティブな経験をしていない人々の視点は捉えにくかった。しかし、我々がとったアプローチは、プログラムについてより多くの経験を持つ人々からより多くの話を聞く可能性が高かったということでもある。
- 簡易版のアウトカム・ハーベスティング手法は、ウィメンズアイのスタッフたちが、ウィメンズアイが貢献したと考える変化の種類を明らかにするために活用された。そのため、ポジティブな事例に焦点が当てられ、調査結果に歪みが生じた可能性がある。しかし、アウトカム・ハーベスティングから出てきた成果のストーリーの収集は、評価の一側面に過ぎず、ウィメンズアイとのワークショップや、その他関係者とのインタビューの結果も合わせて、バランスをとるようにした。
- 評価の規模と範囲から、半構造化インタビューは 17 人であった。対象人数はわずかであったが、フィールドワーク、翻訳、分析のためのリソースを考えると、現実的なものであり、人数を増やすことによって、分析の深さと範囲のトレードオフに直面することになる。サンプル数は、若い女性と年配の女性が AWC からどのような恩恵を受けたかを比較したり、ある場所に住む女性の経験を別の場所と比較したりするなどの、グループ間の比較分析を可能にするほど大きくはなかった。



Itad is a global organisation. Our strategy, monitoring, evaluation and learning services work to make international development more effective. We generate evidence on important issues – from malnutrition to migration – to support our partners to make informed decisions and improve lives.

itad.com

[@ItadLtd](https://twitter.com/ItadLtd)

mail@itad.com

Itad Ltd

Preece House
Davigdor Road Hove,
East Sussex UK
BN3 1RE

+44 (0) 1273 765250

Itad Inc

c/o Open Gov Hub
1100 13th St NW, Suite 800
Washington, DC, 20005
United States

+1 (301) 814 1492